雜載

よし人の勸むるによりて、尾花澤より取つてかへし、其の間七里ばかりなり、日いまだ暮れず、麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる、岩に巖を重ねて山とし、松栢年ふり、土石老いて苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず、岸をめぐり、岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄みゆくのみ覺ゆ、

　ゑづかさや岩にしみ入る蟬の聲〇中略

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責め、酒田の港より東北の方、山を越え磯を傳へ、砂子を踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海の山かくる、闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色又たのもしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴るゝを待つ、其あした天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟をうかぶ、先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の迹をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花のうへ漕ぐとよまれし櫻の老い木、西行法師のかたみを遺す、江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ、寺を干滿珠寺といふ、此の處に行幸ありしことといまだ聞かず、如何なる事にか、この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡くして、南に鳥海天をさゝへ、其の陰うつりて江にあり、西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築きて秋田に通ふ路はるかに、海北にかまへて、波打ち入る處を汐越しといふ、江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて、又異なり、松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し、さびしさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり、

　きさかたや雨に西施がねぶの花

　汐越しや鶴はぎぬれて海涼し

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　出羽國一百人

〔續日本紀六元明〕和銅七年二月辛丑、始令出羽養蠶、　十月丙辰、勅割尾張、上野、信濃、越後等國民二百